

氏 名：武 田 貴美子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 6 7 号

学位授与年月日：平成 2 8 年 3 月 1 8 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：血液透析を導入した患者の妻の体験

～ 透析導入後 3 か月までの語りを通して ～

EXPERIENCES OF WIVES LIVING WITH  
HEMODIALYSIS PATIENTS :

Narratives During the First Three Months of Dialysis

論文審査委員：主査 筒 井 真優美

副査 本 庄 恵 子（正研究指導教員）

副査 佐々木 幾 美（副研究指導教員）

副査 守 田 美奈子

副査 小 宮 敬 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の動機と背景】

透析療法は腎機能低下に対する代替療法であり、透析導入後の療養生活では食事や水分等の自己管理が重要となる。これらの自己管理には、家族や周囲の人々の支えが必要とされる。透析患者は男性が圧倒的に多く、患者の妻は、食事療法等の自己管理を支える役割を担うことが多い。しかし、患者が 1 人で透析室に通院する透析導入期には、透析室の看護師が妻と接する機会はほとんどなく、看護支援が十分に行われているとはいえない。

透析導入後から 3 か月は、患者だけでなく家族（妻）にとっても生活が大きく変化することで、身体的にも精神的にも不安定な時期であるが、先行研究では、透析導入後数ヶ月から数年経過した時点での振り返りによって、その時期の体験を描き出したものがほとんどである。本研究では、その期間、継続的に看護師である研究者が対話を通して妻に直接関わり合うことになる。そこで得られた語りは、これまでの先行研究においてインタビューにより回顧的に捉えられていた「体験」とは異なり、看護師である研究者との相互作用を含むものであり、おのずと妻への支援の要素が入り込むことになる。そこで、妻の語りの分析は、今後、透析導入期における家族支援のあり方を考える上での重要な知見となると考える。

### 【研究の目的】

血液透析導入後から 3 か月までの期間において、透析を受けている患者の妻に対してナラティブ・アプローチを用いたインタビューを継続的に行い、療養する患者とともに暮らす妻の体験を明らかにする。

### 【研究方法】

1. 研究デザイン：透析を導入した患者の妻にナラティブ・アプローチ（野口，2009）を用い

がら、患者の妻の体験を明らかにする質的記述的研究を行った。

2. **研究参加者**：血液透析を導入することになった患者の妻で、研究協力の同意が得られ、3 か月間の継続したインタビューが可能であった4名を研究参加者とした。
3. **データ収集**：平成25年10月から平成27年3月に実施した。透析導入後1か月、2か月後、3か月後の3時点においてナラティブ・アプローチを用いたインタビューを行った。インタビューでは、透析患者となった夫との生活の様子について語ってもらい、妻が研究者と共に療養する夫と生活していくことの意味を見出すことを心掛けた。
4. **倫理的配慮**：日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認（予備調査：2010-93、本調査：2013-15）、および研究施設の研究倫理委員会の承認を得て、研究を実施した。

## 【結果】

1. **療養支援への気負いが和らいでいく**：Aさんは70歳代で、夫（70歳代）と娘の3人暮らしである。Aさんは、腎不全保存期の食事管理の不備に対する反省の気持ちから、夫の療養支援への気負いを抱いていた。Aさんは、語りの中で「白米を食べてよいのか」「高カリウムの症状」などの日々感じている疑問を研究者に尋ね、心配事の緩和につなげていた。そして、Aさんは夫の病状や療養生活を「語る」ことで悔いる気持ちに折り合いをつけ、医療者からの助言を得ながら夫の療養支援に対する気負いが少しずつ和らいでいった。透析導入後3か月を過ぎると、Aさんは、夫の体調がよくなったことや医療者や研究者からの助言を活かして、夫への療養支援を「ちょっとアバウトにしてもいい」とようやく思えるようになり、療養支援への気負いが和らいでいった。
2. **元気になることへの期待と焦りに揺れる**：Bさんは60歳代で介護士として働いており、夫は鍼灸院を営んでいた。Bさんは、「透析すれば元気になる」と透析への期待を抱き、夫の仕事復帰に期待を寄せていた。しかし、透析導入後1か月が経過しても夫の体調がよくならないために、Bさんは戸惑いや苛立ちを感じていた。透析導入2か月が過ぎると夫に活気が見え始め、Bさんは体調がよくなるには時間が必要だと実感し、改めて夫が元気になることに期待を寄せていった。しかし、透析導入後3か月、夫は再び体調不良となり、Bさんは夫の体調が目に見えてよくなるものではないことに気づくと共に、夫が元気になることへの自身の焦りに気づいていった。Bさんは夫の状態に気を揉みながらも、夫が透析患者であることに同情されることを懸念し、自分から夫のことを他者に話さなくてもいいと考えていた。
3. **透析患者となった夫との関係を捉え直す**：Cさんは50歳代で、透析導入となった夫（50歳代）と長男の3人暮らしである。Cさん夫婦はそれぞれに仕事を持ち、自勤務時間のずれがあるために、互いに自立した生活を送っていた。透析導入前のCさん夫婦の関係は、夫が苛立つことが多く、言い合いになることも多かった。しかし、透析導入後、Cさんは夫が気弱になり「優しくなった」と夫の変化を捉えていた。また、「語り」を通して、透析導入により、元々世話好きではなかった自分が夫のために世話をするようになったという自分の変化や、夫婦の関係が深まったことに気づいていた。そして、導入1か月後には、なかなか透析を受け入れられない夫を見守っている様子を語ったAさんであったが、導入3か月後には、シャント部位が隆起した他の患者の腕をみたときのAさんの驚きや、夫もいずれそうなるのかという疑問や受け入れがたい気持ちが語られた。
4. **不安定な夫の状態に合わせて一喜一憂する**：Dさんは60歳代で、透析導入となった夫（60歳

代)と2人暮らしである。外来透析に移行した夫は体調不良が続き、Dさんの迎えが必要であった。Dさんは透析導入後1か月が経過した頃に透析生活に慣れてきた兆しや夫が意欲を取り戻してきたことに気づき、安堵した。しかし、透析導入後3か月に夫は原因不明の頭痛により生活援助が必要となった。Dさんは様々な病気を抱える夫の体調が透析だけではどうにもならないことを悟り、今後の行く末を案じながらも夫の体調に合わせて生活していくしかないを受け止めていった。そして、Dさんは不安定な状態の夫と暮らすなかで、透析に関する知識がある人との交流の機会を求めている。

### 【考察】

妻は透析を受ける夫への療養支援に気負いを抱いていたが、この背景には夫の透析導入に対して食事管理などの妻役割を十分に果たせなかったという自責の念があると考えられる。透析導入した夫への療養支援を妻に求めることが多いが、自責の念を抱く妻にとっては重圧となり、気負いが強まると考える。看護師は夫への療養支援に懸命に取り組む妻が抱く自責の念や気負いを考慮しながら、妻を支援することが必要である。

また、妻は「透析をしたら元気になる」という期待を抱いたり、「透析をしないと終わり」と語り、透析を夫の生命をつなぐ拠り所として捉えていることが示唆された。妻にとっての透析への期待は、夫がこれまで通りに仕事や家庭内役割を担うことであった。透析導入3か月の期間に、定期的に透析療法を受けている患者を医療者は順調と捉えるが、妻にとっては元通りにならない不安定な状態の夫であり、このことが妻の不安や戸惑いにつながっていることが示唆された。

そして、妻は、透析患者というスティグマが付与されることや周囲の反応を意識し、夫のことを「話さない」「話したくない」という思いを抱いていた。妻は、夫の透析導入について他者に話さずに過ごす一方で、自分の思いをわかってくれる人に語る機会を求めている。本研究では、透析看護の経験をもつ研究者が妻の「語り」を聴いたが、このなかで、妻は食事・高カリウム血症の症状・シャントの隆起などの日々の生活の中で疑問に感じていることを表出し、気持ちの整理につなげていた。透析療法の知識をもつ看護師が妻の語りを聴き、共に体験を意味づけていくことは、妻の自責の念や気負いを和らげ、妻が夫の状況を具体的に理解して療養生活の見通しをもつことにつながると考える。妻にとって看護師が聞き手になることは、夫の療養支援についての助言を得る機会となるだけでなく、夫との暮らしの中で生じる周囲の人々には言いづらい思いを「語る」機会になることが示唆された。この過程は、医療者と接する機会の少ない透析患者の妻が看護師との信頼関係を構築していくことにもつながると考える。

## 論文審査の結果の要旨

年々増加傾向にある、生涯にわたり療養生活が必要とされる血液透析をうける患者の家族に焦点をあてた研究であり、家族支援を考える上で意義がある。

本研究は、血液透析導入 3 か月の期間に、1 ヶ月ごとに 3 回にわたる継続的なインタビューを実施し、結果を分析・考察している。透析導入 3 か月の期間に、妻は、自責の念や気負いを抱きやすいこと、「透析したら元気になる」というイメージとは異なり不安定な夫の状況に不安や戸惑いを抱くこと、スティグマの付与を意識し夫のことを他者には話さないことなどが考察されたことは、この時期の妻の体験に沿ったケアの構築を検討するための知見の 1 つとして評価できる。

また、本研究は、透析看護の経験をもつ研究者がナラティブ・アプローチを用いたインタビューを継続的に行い妻の体験を明らかにすることで、この時期の看護ケアの方向性を示唆したことに意義がある。妻にとって、透析療法に関する知識をもつ看護師が聴き手になることは、夫の療養支援についての具体的な助言を得る機会となること、周囲の人々には言いにくい透析療法への思いを「語る」機会になること、さらには「語り」を通して体験を意味づけることで療養生活に見通しをもつことにつながる可能性があることが考察された。これらは、血液透析患者と共に暮らす妻に対するケアとして、語りを通して体験を意味づけられるように看護師が関わることの意義を示すものであり、この時期の患者の妻への看護ケアの具体的な方略の 1 つを示唆するものといえる。

そして、本研究より、妻が専門家からの支援を必要としている透析導入 3 か月の時期に看護支援を行うことは、医療者と接する機会の少ない透析患者の妻が看護師との信頼関係を構築することにつながることを示唆された。このことは、長期間にわたる療養を特徴とする透析療法を受ける患者の家族と医療者との信頼関係の構築する手立ての考えるための 1 つの知見として評価できる。

本博士学位論文審査会では、学位規程第 3 条により、審査の結果、博士（看護学）の学位論文のとして「合格」と判定した。その後、最終試験を行い、「合格」と認めた。